第 3 回所蔵品によるテーマ展

「自然との対話」

平成 23 年 7 月 29 日（金）～8 月 28 日（日）

福井県立美術館

自然の表現

古来より日本人は四季の移り変わりや動物を身近なものとしてきました。四季折々の草木や理想の風景（山水）を描く事はもちろん、富士山のような名勝や松竹梅、鶴亀、孔雀などのように吉祥のシンボルになっているものは、工芸品や調度品のデザインに特に好んであしらわれました。龍虎や鷹などの動物もその勇壮な姿から武家にふさわしい画題です。

このような伝統的画題に加え、西洋に学んだ冷徹なまでの写実性や、抽象的表現も加わり、現在はあらゆる表現技法を用いて自然や動物が描かれています。そしてそのいずれも自然と対話し、愛着を持ち続ける日本人の心情を如実に物語っています。

季節を楽しむ人々

季節の到来は平穏な毎日に豊かな彩りを添えます。夏は水辺に涼を求め、「菟道（うじ）蛍狩図」のように京都の宇治川での蛍狩り、もしくは「角田川舟遊」のように東京随一の繁華街を横断する隅田川での川遊びはいかがでしょう。秋には月に、春は桜に心を奪われる、季節の楽しみをここで体感してみませんか。

岡倉天心コーナー

「六角堂をしのんで」

大観・春草の朦朧体

３月 11 日の東日本大地震の津波によって、1902（明治 35）年に岡倉天心が建てた「六角堂」（登録有形文化財建造物）が消失しました。「六角堂」は、茨城県北茨城市五浦（いずら）海岸の崖の先端にあり、目前には太平洋のパノラマが広がる内寸 3.6m の小空間で、五浦のシンボルとも言える建造物でした。今回の天心コーナーでは六角堂消失をしのび、日本美術院の日本画研究所が置かれたこの地に、天心に従ってやって来た横山大観・菱田春草の苦闘の時代の作品を紹介します。

1906（明治 39）年、天心が五浦に率いてきた４人の弟子のうち、下村観山・木村武山はともかくとして、かねてから急進的な試み（朦朧体）を推し進めていた大観・春草には書画屋からの注文もない、その日のものに事欠く極端に貧しい生活が待っていました。朦朧体とは 1900（明治 33）年頃から彼らが始めた、輪郭線を用いない没線画法で、線を命とする日本画壇では受け入れられませんでした。

後に近代日本画の巨匠といわれる彼らが、苦難に耐えて自分の信じる絵を追求していった軌跡が、五浦の２年余りを含むこの時代の作品に刻まれています。

岡倉天心と五浦

天心は晩年の 10 年近く、五浦に居を定めていました。しかしその滞留期間は常に短く、一年の半分は海外や国内旅行に出て不在がちでした。五浦に来た時は天気さえよければ殆ど毎日釣りに出かけ、魚がつかなくなると舟の上で読書に耽るという生活でした。

その五浦での 1903（明治 36）年から没年の 1913（大正 2）年までの間に書き上げられたのが「茶の本」などの天心の英文三部作です。いわば、この 10 年が天心の思想を熟成させた重要な時代であり、日本美術院の画家たちが次に飛躍するための揺籃期であったといえるでしょう。